クロスロード新聞

第23号

2009年5月11日

祝受賞！ & 世界初！

発行元：108-8345　港区三田2-15-45
慶應義塾大学商学部　吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局

呉消防の葛原さんと林さんが最優秀賞！

呉市消防局の葛原朋幸さんと林国夫さんが、全国消防協会平成２０年度「消防に関する論文」で、最優秀賞を受賞されました。林さんは、この新聞でもおなじみの方ですね。論文のタイトルは、「カードゲーム『ぼうさいダック』を使った幼児防災教育と総合的な防災訓練について」で、そう、ぼうさいダックを活用した防災教育の実践を論文にしてくださいました。表彰式は5月28日福岡国際会議場であっとおどろく仕掛けのある発表の予定でしたが、なんと！新型インフルエンザ発生の影響で会が流会となってしまったそうです。晴れ舞台が延期になってしまったのは残念ですが、この快挙、みなさんと一緒にお祝いしたいと思います。

いよいよDVD発売！「うちらのため」改め「歩一歩たいそう」

呉からもう1つうれしいニュースです。クロスロード新聞でも連続してご紹介し、また「ビデオはないのか」と事務局にもお問い合わせの多かった「うちらのため」が、いよいよDVD(CD,解説書付)になって発売されます。また、発売を機に「うちらのため」としていた名称を、「歩一歩（ほいっぽ）たいそう」という名前に改められました。「歩一歩」とは、step by step(ステップバイステップ）で歩みを進めて地域の力を上げていこうという意味が込められています。制作された呉市社会福祉協議会の近藤さんのお話によると(近藤さんも神戸の集いにいらしてくださいました)、呉市内で実施されている「ふれあいいきいきサロン（世代間交流)」や民生委員児童委員などの地域団体、幼稚園、保育所へは無料配布、 その他は有料販売される(価格未定)とのことです。

その発売日は、6月29日。この日は、今年、すなわち2009年から、「ひろしま防災の日」に制定されました(2月の県議会決定によるそうです)。この日は、1999年6月29日には、広島県内で325件の土砂災害、23人の死者・行方不明者を出す「6．29豪雨」があったことにちなんでいます。この災害をきっかけに翌々年の2001年「土砂災害防止法」が施行されました。

呉から全国のみなさんへの贈り物として、この「歩一歩たいそう」を、広めて行かれる予定とのことですので、是非クロスロードサポーターのみなさんのご支援もお願いしたいと思います。

引き出物にクロスロード！

世界初のニュースです。クロスロード新聞で活躍されている方のお一人が、5月1日めでたく結婚されました。その引き出物の1つが、なんと！クロスロード市民編であったそうです。

え？誰の披露宴の話?と思われる方、まもなく御本人から報告頂きますので、これもどうぞお楽しみに。伺ったところによると、新郎余興でクロスロードを3問実施してくださったそうです。

クロスロード披露宴編もいよいよ開発なるか？

目次

最優秀賞！ 1
歩一歩たいそう 1
引き出物に！！ 1
おれらのため 2
クロスロード・ネクスト 2
ソナエーター(11) 3
こんなところに心理学(23) 4
誤報の訂正をする時には 4
薬物乱用防止編 5
子供に教える安全 6−7
名古屋から報告 7
中級認定 7
問題の作り方 8
南海地震後のインタビュー 8

クロスロード次号のご案内
発行予定日：
2009．7．23．

クロスロード災害ボランティア編など

責任編集

- チームクロスロード
- クロスロード・サポーター
- SPECIAL THANKS:
  高知県地震・防災課
  小溝智子（漫画企画）

歩一歩たいそう早速翻訳！

　仙台で防災意識の普及活動に熱心に取り組まれている田中勢子さんが、「うちらのため」改め「歩一歩たいそう」の歌詞の仙台バージョンをお送り下さいました。「翻訳」という表現は適切ではないかもしれませんが、呉から始まったこの体操が、地域にあった形で発展していくのはうれしいことですね。
　タイトルは「歩一歩たいそう（ずーずー弁バージョン）」です。全部はご紹介しきれませんが、1番と12番を紹介しますね。翻訳は仙台市五輪町内会有志のみなさんです。
　なお、送ってくださった田中さんによると、同じ仙台でも海側と陸側では微妙に言葉遣いに違いがあり、「地域によってあった表現で歌ってくださるよう」お願いされているとのことです。
(事務局注：この翻訳は呉市社会福祉協議会の承諾を受けて行われました。)

1．（地震）
もーすも　ずすんが　おぎだなら
まーずは　あだまを　まもりましょう
りょうてで　あだまを　かがえこみ
つぐえの　すーたさ　もぐりましょう

12．（ご近所さん）
めいわぐ　かーげて　ごめんなさい
きにすんさんな　おだがいよ
ほほえみがえしが　ごきんじょに
すろがる　わがまち　せんだいす

「クロスロード・ネクスト」まもなく発売！

　クロスロードの集いでもご紹介しましたが、「防災ゲームで学ぶリスク･コミュニケーション-クロスロードへの招待」の続編「クロスロード・ネクスト-　続：ゲームで学ぶリスク･コミュニケーション」(吉川肇子・矢守克也･杉浦淳吉　著)がナカニシヤ出版からまもなく発売(税込み2625円)となります。
　目次をご紹介します。「ネクスト」という書名には、クロスロードをご愛顧くださった皆様への感謝とともに、クロスロードに続く新しい展開の予告の意味もこめられています。
　クロスロード関係では、前著における神戸編の紹介に続き、市民編、要援護者編、食品安全編、感染症編など、クロスロードの様々なバージョンの紹介や、すべて紹介はしきれなかったのですが、各地域での展開なども掲載してあります。
　ちらりとお見せするのは新刊の表紙(一部)です。書店で目立つピンク！是非手にとってレジへGO！前著共々かわいがって下さい。よろしくお願いします。

さてさて、どの部分の切り抜きなのか？？？

(目次)
第1部　クロスロードのポテンシャル
　第1章：クロスロードとは何か
　第2章：クロスロード3年
　第3章：「終わらない対話」を実現するクロスロード

第2部　現場に活かすクロスロード
　第1章：ゲームという場を超えて
　第2章：他の手法との併用
　第3章：質問紙版のデータ分析
　第4章：教育技法としてのクロスロード－方法・技法の洗練

第3部　防災教育におけるゲームの活用
　第1章：ゲームで何を学ぶのか
　第2章：生活とつなげる－ぼうさいすごろく
　第3章：動いて学ぶ－ぼうさいダック

第4部　クロスロードの新展開
　第1章：市民編
　第2章：要援護者編
　第3章：感染症編
　第4章：食品安全編
　第5章：さまざまな展開

第5部　展望－われわれはゲームで何をしているのか

ソナエーター(11)：おしゃれな女子のソナエーター生活

　みなさん、はじめまして。神戸学院大学の舩木です。吉川先生、矢守先生から連絡を頂き、ソナエーターのコーナーに原稿を書かせていただいております。このような機会を頂き、これまでの新聞に載っていたソナエーターコーナーの原稿を改めて読んでいるうちに、安請け合いをしてしまい失敗したな・・ということに気がつきました。私はこれまでに紹介されていた凄腕のソナエーターの足もとにも及ばず、特に特別なことをしているわけではありません。しかし、何が書けることがないか・・と頭をひねって考えたところ、ベランダのガラスに飛散防止のフィルムを仕込んでもらったことや、家具の固定を実はしていたことを思い出しました。そうやって考えてみると、あれ？結構身の回りにいろいろあるのかな？と思い出し始めました。

　職業柄、新しい防災グッズがあれば購入しますし、情報を集めるのはある種趣味となっています。こだわりのものを集めるのは好きで、収集癖もありますので、研究室や家には各種のいわゆる「防災グッズ」がそろっています（しかし、モノが増えすぎ、整理ができきっていないのが難点です）。

　災害時など必要な時に使おうとしても、そのモノがあったこと自体が頭にないと役にたちません。ですので、これは！と思ったものやお気に入りのものは身の回りにおいて、普段から使うようにしています（というより、勝手にそうしていたことに改めて気付きました）。ぐうたらモノのなせる業です・・

　私が普段から使っているお気に入りのアイテムは、SONYの手回し式充電ラジオとVICTORINOXのトラベラーライトです。先ほど、防災グッズがあれば買うという言い方をしましたが、これらの点については、購入のきっかけは「防災だから」という意味合いではありませんでした。SONYの手回し式充電ラジオは私の好きな「オレンジ色」であることが購入のきっかけで、VICTORINOXのトラベラーライトは、いろいろついているのに加えて、旅先のどこでもビールとワインが飲めるという理由で購入しました（栓抜きがなくて困ったことがあるので）。ラジオは家で使っていて、トラベラーライトは旅に出る際には常に持参します。こうやって商品を紹介していると、通販のコーナーのようで、SONYとVICTORINOXの回しもののように聞こえますが（違いますよ）、どちらも普通に持っていても「おしゃれ」な点と「色」、そして「多機能」なところが気に入ってます。用途が様々なので、普段からいろいろなチャンスで使うことができます。ですので、普段使いに回されているんだと思います。

　とはいえ、これだけ常に持っていれば大丈夫なのか！？というと、もちろんそういうわけではありません。「あー、これがあったらよかったのになぁ」、ということはいつどんな時にでもあると思います。なかなか「準備万端」とはいかないものです。災害のために必要なものをモノを普段から備えておくことに加えて、必要な時に必要なモノを「使う」力や、工夫をして代用できるものを「考える」力を備える必要がありますよね・・

（神戸学院大学舩木伸江先生）

写真左：手回しラジオ
右下：VICTRINOXのナイフ
そして右上！：「なまずー」(埼玉にしか売っていないナマズのぬいぐるみです。)

↑VICTRINOXここにもファンが。。。(誰?)

こんなところに心理学(23)：誤報の心理学

災害に関する余地情報や警報が空振りに終わったとき、情報に対する信頼が低下することが懸念されます。結果として、次の警告が無視されがちになります。このことを「オオカミ少年効果」と言ったりもしますね。

本当は、避難勧告など災害情報が空振りに終わったとき、「空振りで良かった」と安心できればよいのですが、「避難が面倒だった」とか「大げさすぎ」というように勧告を出した相手を非難しがちです。そうすると、勧告を出す方も「また非難されるのではないか」と心配になって、警報や避難勧告を出すのをためらうようになるかもしれません。まさに悪循環です。

誤報に対する人々の信頼を損ねない方法は、すでにいくつか提案され、検証もされていますので、代表的なものをここでご紹介しましょう。

1つは、情報の段階を細かくすることです。たとえば、避難を勧めるにあたって、最初から避難勧告にするのではなく、その前の段階をいくつか作ると言うことです。最近日本にも導入された「避難準備情報」はその1例ですね。避難勧告のように最終段階の情報が空振りになると信頼が低下しますが、それ以前の早い段階の情報の取り消しは、本体の情報(この例で言えば避難勧告)の信頼を損なわないことがわかっています。このように情報の段階を細かくすることが有効なのですが、その場合の注意があります。レベルの分け方が名前で明らかであるように、情報の命名に気をつける必要があります。残念ながら、「東海地震観測情報」「東海地震注意情報」「東海地震予知情報」は、段階の区別がつきにくい命名の例ですね。

空振りに至った経緯についての説明も重要です。その説明がきちんとなされていれば、情報に対する信頼は下がらないことがわかっています。何をきっかけにして情報が出されたのか、なぜ誤報となったのか、誰に責任があるのか、これらのことを住民が理解できるように説明しなくてはなりません。

自然災害の場合、警報や避難勧告が空振りに終わるのは予期せぬ天候の変化や安全の余裕を見過ぎたことによる場合が多いのですが、そうではなく、人間のミスで、誤報が起こったような場合、、、そう、4月のミサイル騒動のような場合は、これは謝るしかありません。

謝るについても、そのやり方次第で、相手の印象が異なることが明らかになっています。ここで、上手な謝罪のコツを伝授いたしましょう。

まず、誤りの部分を確認しておいて、まとめて訂正して謝るようにします。あとから誤りに気づいて訂正を小出しにすると、非常に不正確な印象を与えてしまいます。

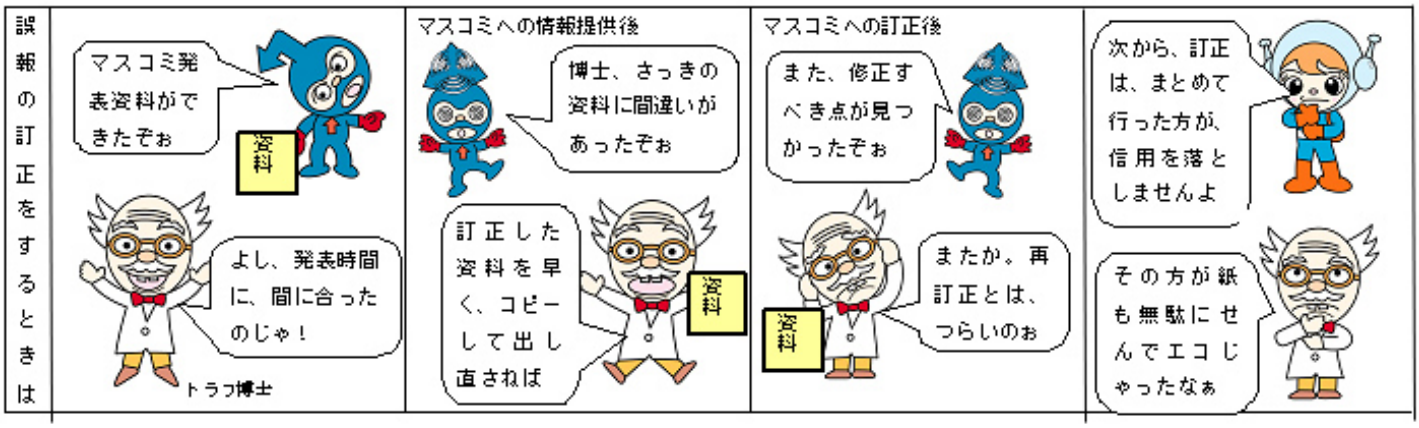
謝罪は責任の所在が自分(あるいは自組織)にあることを認めるためにするものですから、責任を認めていることが分かるように、謝罪の言葉遣いにも気をつける必要があります。たとえば、「遺憾に存じます」や「残念に思います」は、責任の所在がどこにあるのかがわかりにくく、謝罪の表現として適切ではありません。また、「結果としてご迷惑をおかけしました」のような表現も、責任逃れをしているような印象を与えます。4月の謝罪でも「遺憾」だの「結果として」だのと言う言葉が乱れ飛びましたね。。。

被害や迷惑を被った相手が明らかな場合には、それを意識していることを、謝罪の表現の中で明示する必要があります。最後に、今後ミスがないように対応することを明確にしておきます。

ちなみに、心理学ではお詫びと言い訳を区別しています。言い訳は、問題が生じた原因の所在は別の所にある(自らにはない)と主張することによって、責任は自分にないと相手にわからせるものです。これにもいくつかのテクニックがあるのですが、、、紙幅がつきてしまいました。上手な言い訳をする秘密のコツを、またいつかこっそりサポーターのみなさんにお伝えしましょう。

誤報の訂正をするときには

高知県防災キャラクター©やなせたかし



漫画企画の小溝智子さんが、高知県環境共生課に異動されました！
温暖化対策チーフです。環境と防災、つながり深いですね。

クロスロード薬物乱用防止編

和歌山県御坊市御坊保健所の小河さんから、クロスロード薬物乱用防止編を試作したということで送ってくださいましたので、そのうちの2問をクロスノート、クロスチャートとともに、ご紹介します。

小河さんは、仕事柄、中高生に違法薬物の危険性について講習なさることがあるそうですが、形式としては、大勢の初対面の生徒の前で話をするということがおおいそうです。そのとき、必ずしも話を聞いてくれているのかどうか分からない生徒に対して話をするこの形式に限界を感じており、それを補うツールがないものか、と考え、作成されてみたそうです。小河さんは神戸でのファシリテーターのつどいに参加されており、クロスロードを未成年の生徒を対象にした事例は少ないという印象だったため、これらの生徒のために考えられたということです。

□あなたは…　大学生　…です。

問題文：
以前、薬物をすすめてきた仲のいい友達や先輩が、「お金はいらないから薬をやるよ」と、しつこく薬物をすすめてきました。断らなければあなたが法律違反で逮捕されます。
警察に通報しますか？

YES（　通報する　）　⇔　NO（　通報しない　）

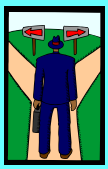
クロスノート
---YES/NOの問題点を整理---

◆YESの問題点
・自分が何も通報する必要はないのでは？
・友達や先輩を犯罪者にしてしまう
・友達や先輩との関係が壊れてしまう
・自分も仲間だと警察に疑われてしまう

◆NOの問題点
・友達や先輩が悪いことをしているのを止めさせることができない
・通報しなければまたすすめられる

□あなたは…　芸能事務所の社長　…です。

問題文：
薬物の使用で逮捕された自分の会社の超人気芸能人を復帰させたいと考えている。事件からまだ1年しかたっていないが、本人も深く反省しており、立ち直りたいと思っている。その芸能人を復帰させる？



YES（　させる　）　⇔　NO（　させない　）

クロスノート
---YES/NOの問題点を整理---

◆YESの問題点
・薬物で逮捕されたのに処分が軽すぎると苦情がくる
・復帰させるのが本人のためにならないのではないか？
・会社のイメージダウンにならないか？

◆NOの問題点
・早く復帰してもらわなければ会社の収入が増えない
・今復帰できなければ、もう芸能人としてはだめなのではないか？
・ファンの期待に応えられない

クロスチャート
---判断のポイントを列挙---

◆判断のポイントや注意点
人気があるから簡単に許されるというものではない
普通の人ならそう簡単にはまわりの人が許してくれない
復帰して稼いでほしい
早く復帰したところを見たいというファンの声に応えたい
イメージがダウンして前のようには見れないのではないか

◆事前にできる備え
有名人である前に社会人であるという社内での教育
発覚前にクビにする

子供に教える安全～防犯編～

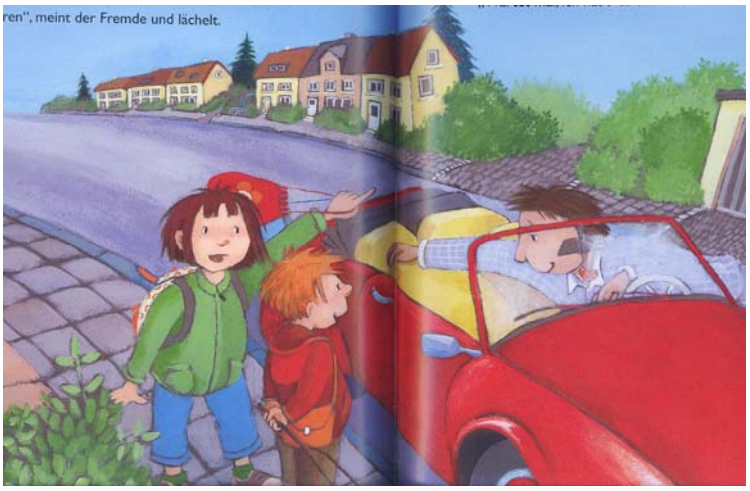
子供に教える安全については、交通安全や防災など、いろいろな分野がありますが、今回は防犯について、ドイツとスイスの教材をご紹介しましょう。

大人による誘拐や児童虐待は、これらの国でも重要な問題の1つであり、子供にこの問題や対処を教える絵本を本屋でたくさん見ることができます。写真1は、そのような本の例(表紙)、写真2は、その中の1ページです。特に，車に乗るように誘われることが多いので、このような場面が絵本の中ではよく登場します。

写真３は、ドイツフランクフルト近郊のある町で撮ったものです。右の扉にシールが貼ってあるのがごらんになれるでしょうか?(拡大したものが写真4)書かれているドイツ語は「避難所」という意味です。ちょっと読みにくいのですが、その下には、「私たちがいるところなら、君は安心だ／守られているよ」と書かれています。つまり、子供がこのシールの貼ってあるお店に駆け込むことができる目印のシールなのです。日本でいうところの「子供110番」ですが、違いは、大人による犯罪(誘拐や暴力など)だけではなく、子供同士のいじめを受けた場合にも、このシールのあるところに行って、大人の助けを求めることができるという点です。ドイツは、近年移民が増えたこともあり、そういう子ども達へのいじめの問題も顕在化していることも背景にあるようです。

写真5と6は、スイスの子供向けの教材です。暴力について絵を見て考えさせるものですが、写真5は大人による性的虐待を、写真6は親による虐待を、それぞれテーマにしています。登場しているのがいずれも動物になっているのは、人間で描写するとあまりに直接的で子供が恐怖心を抱くので、それを避けるためであると、解説されています。実際の活用場面では、これらの状況に対して、どのような解決方法があるのか、子どもたち自身に考えさせます。

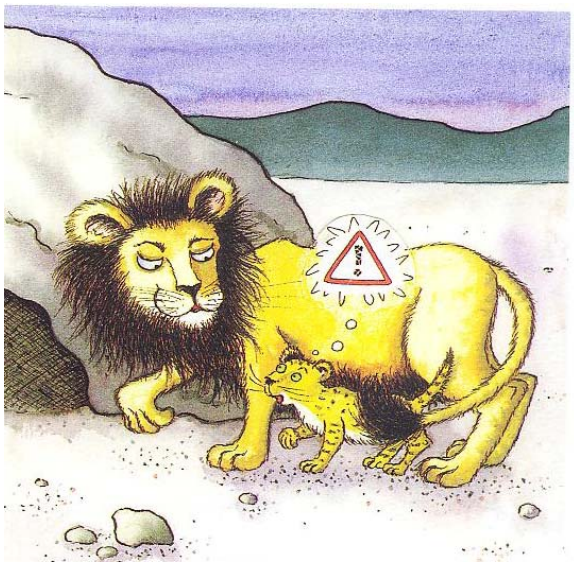
写真1→



↑写真２

下↓：写真3
右下↘　：写真4

子供に教える安全(写真の続き)



←写真5

写真6→

名古屋の鷲見さんから連続報告

前回前々回と名古屋でのクロスロードの展開をご紹介していますが、この活動を中心的に推進してくださっているのが鷲見修さん。最近のご報告から、クロスロードの進め方について、問題提起していただいたので、転載させていただきます。2月に名古屋の防災ボランティア団体の研修会でなさった時の報告です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あちこちでゲームを重ねてきて分かったことは、人数が５人か７人で割り切れずに端数が出てしまう場合、例えば、最後のテーブルは同数（６人で３：３とか）とか端数３人か４人でテーブルを作ってしまうと、必ずそのテーブルの人は「５人のテーブルに入りたかった」と不満が残るようです。「条件が違っては公平でない」と思われるのかもしれません。

賞品として用意するのは、毎回１００円ショップの防災用品なのでたいした差はないと思うのですが・・・・。

今回も参加者１０人の予定が８人になってしまったため、たまたまゲーム経験者の１人を外して７人のテーブルを作り、経験者の１人には１問ずつＹｅｓ・Ｎｏのどちらが多数派となるかを予測してカードを出していただきました。すると、７人が盛り上がったのはもちろんのこと、経験者の１人もまずまず青座布団が貯まってかなり喜んでいただけました。

今回の参加者の中には区役所と区社協の防災担当者、被災現場支援の経験豊富な人、避難所運営やトリアージに詳しい人などがいて、選択・判断に苦しみ、議論の後に専門的な説明があったりしてとても勉強になり楽しかったという感想が寄せられました。

名古屋では多くのファシリテータが誕生して以来、各地域や役所内でもクロスロードゲームが実践されているという話が聞こえてくるようになりました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

(事務局より補足)クロスロードの進め方については、昨年秋のファシリテータの集いでもいくつか問題が挙げられたところですので、次回のファシリテータの集いでは、この件をテーマに議論したいなとチームクロスロードで計画中です。時期は例によって、今年の秋から冬頃。場所はこれから検討に入ります。企画の提案もお待ちしています。

進級者発表！

以下の方を中級に認定いたしました。(敬称略)
和歌山県御坊市御坊保健所　小河 寛

同じ宛先に質問への回答応募もお待ちしております(前号も参照ください)

【応募先】108-8345
港区三田2-15-45
慶應義塾大学商学部　吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局
電話：06-5427-1251　ファックス：03-5427-1578
メール：kiikkawa@aoni.waseda.jp

電子投稿はこちら↓
http://maechan.net/crossroad/toukou.html

質問への回答：まずはチームクロスロードから

クロスロードのつどい in 神戸の参加者の方から頂いた質問のアンサー編です。すべてにお答えするのはすぐにはできませんが、まずはチームクロスロードから、少しずつお答えしていこうと思っています。

まずは、一番質問の多かった問題作成の方法についてです。これといって決まった方法があるわけではありませんが、私たちがどのようなことを意識して作っているのかのかをご紹介したいと思います。

第1には、長さです。会場の制約から、クロスロードをカードとしてではなく、パワーポイント形式にして使われる場合も多いかと思いますが、カードであることを意識することは、問題作成上とても重要です。市販されている名刺大の大きさですと，状況の説明部分の文字数は，およそ70字から110字におさまっています。文字数の制約があることで、「この状況で本当に伝えたいことは何なのか」に悩むことになり、これはとてもよい効果を生んでいると思います。チームクロスロードのメンバーでもある愛知教育大学の杉浦淳吉先生は、学生に問題を作ってもらうときには、100字の原稿用紙風のマス目を用意し、それに記入させる形式を使っています。

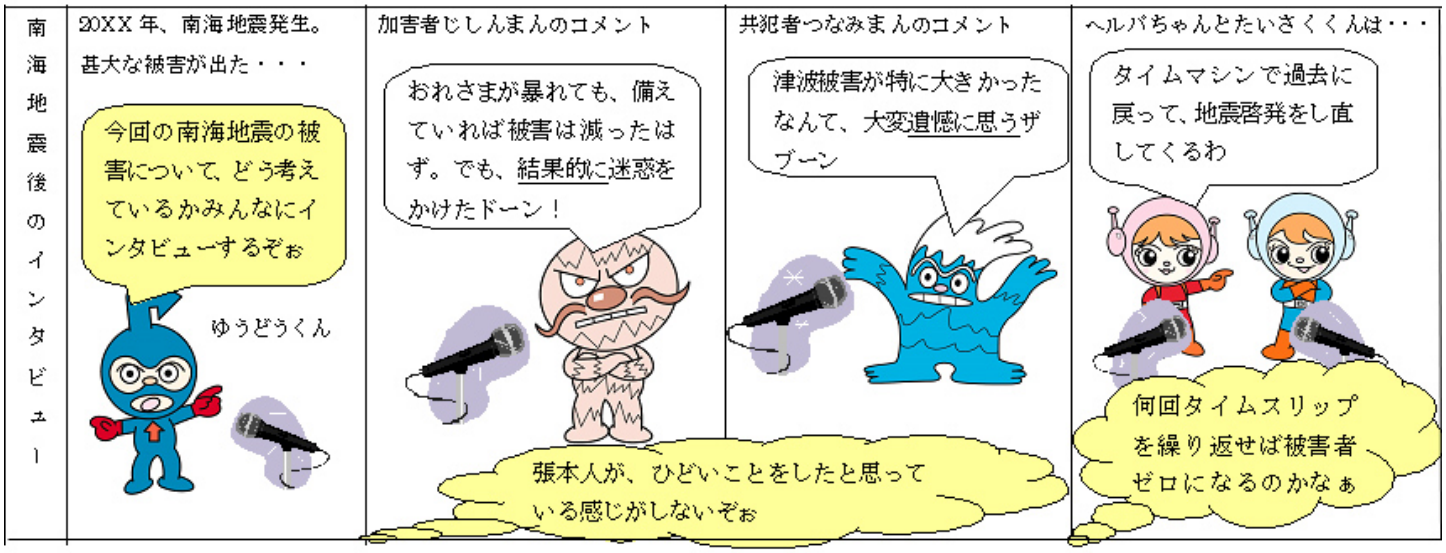
字数に制約をかけるという点では、５・７・５の川柳を考えるようなものという比喩が近いと思います。川柳を考えるときに、無理矢理字数を17文字におさめるのは、一見不自由な形式に見ますが、その制限があることが、むしろ表現をじっくり考えるということにつながっているといえるのではないでしょうか?

ただし、文字数内に納めようとするあまり、問題文が短くなりすぎるのも考えものです。短くすることによって起こる問題点は2つかなと思います。

1つは、あまりに一般的な話になりすぎて、建前で話すしかなくなってしまうような場合です。たとえば、「地震が起きた。ペットを避難所に連れて行く?」という問題だったどうでしょうか?「ペットはそもそも避難所に連れて行くべきではない」という一般論か「私の飼っている犬は家族の一員だから、その犬をおいていくことはできない」という個人的な意見に議論が偏ってしまう心配があります。そこで、この問題の「ペット」を「犬」というように限定するとか、(市民編にあるように)「ゴールデンレトリバーのメス3歳」と付加的な情報をつける方が、「大きい犬を連れて行くのはよくない」とか「おとなしい犬種ならばいいのでは？」といように、色々な視点からの議論が引き出せます。

問題文を短くしすぎることによるもう1つありそうな問題は、問題作成者（や、ファシリテータ)しか知らない情報が、解説の場になって出てくるような場合です。たとえば、「被災者同士炊き出し中。中にキノコがはいっているが食べる？」というような問題だったどうでしょう?特定のキノコが特殊な健康被害をもたらすということを知っている参加者(プレーヤ)は、おそらく少ないでしょう。そのことを解説で説明した場合、これまで一生懸命話し合ってきた議論は何だったのだろうか?ということになりかねません。参加者が知識のないような情報については、問題文中にさりげなく説明しておいた方がいいですね。

第2は、状況の説明の仕方にも関連しますが、選択肢の作り方も、ちょっと配慮すると、クロスロードらしくなります。クロスロードはあれかこれかの意思決定を問うているように見えますが、本当のところ、極めて人間的な悩みを表現しているともいえるのです。時に、イエスかノーかで意見が対立することがあったとしても、どちらが正しいというのではなく、「あなたと私は意見が合わない。しかし、そこに悩みがあることは理解できる」と思えることこそ、クロスロードをやってみる意義の1つだと考えています。この意味でクロスロードは「人生相談」です。この特徴は、チームクロスロードが作成した問題文の「クセ」にも現れています。「いっそ～する？」とか、「ここは思い切って～する？」というような「えいや」の決断は、悩んだあげくになされる意味ある決断です。現実の場面ではイエスかノーか、どちらかを選ぶしかないのだけれど、選んだあとにできるだけ少なく後悔するために、私たちは悩み抜けるような問題作りを目指しています。

南海地震後のインタビュー

高知県防災キャラクター©やなせたかし